

磐座神社のいわくら



磐座神社（西大月）

二、人々の生活と信仰

自然への祈り

じょうもん

縄文時代の人たちは、山や川、岩、

樹木、空など、自然のものすべてに「タマシイ」が

あり、また、「カミ」が宿ると信じていました。特

に山には強い力を持つ「カミ」が宿ると信じ、「山

のカミ」のおかげで山菜や木の実、シカなどの獣が

とれ、逆に、土砂崩れや山火事がおこったり、人が

山の獣に襲われたり病気になるのは、「山のカミ」

が怒っているためだと考えました。そこで、人々は

山に向かって祈り、お供え物をしました。

弥生時代になると、人々は山や丘を降りて平地で

生活をするようになりました。生活の場は山から遠

ざかりましたが、人々は山に対して恐れと尊敬の気

持ちを持ち続けました。そこで、山がよく見える場

所にある岩をその山に見立て、山に祈るかわりにそ



荒島岳

の岩を祈るようになりまし。やがて、その岩の前に建物が建てられるようになり、その建物の中でカミに祈るようになりまし。

また、古代から不思議な力を持つもの、恐ろしいものとしてあがめられてきた川や岩、木などの自然のものを祈る場所もしだいに決まってきた、そこに建物が

つくられるようになりまし。これが神社の始まりです。

奈良時代になると、カミへの信仰とともに、自分たちの祖先を祀ることも盛んになりました。祖先が同じ人の集団を「氏」といい、自分たちの祖先のことを「氏神」、自分たちのことを「氏人」と呼びまし。氏神への信仰を中心に氏人の団結

は強められ、自分たちの氏を他の氏よりもより優位にするため、それぞれの氏に伝わる祖先に関するいい伝えがつくられ、氏の歴史を物語る説話や伝説、神話として伝えられています。

大野の東にそびえる荒島岳も、昔からあがめら

れてきた山の一つです。

この山は、『延喜式』(九〇五年・延喜五〇九六七年・康保四)には「阿羅志摩我多氣」と書かれています。また、『和名類聚抄』(承平年中・九三一年〇九三八)には「大山」とあり、『絵図記』(一六八五年・貞享二)には「嵐間ヶ嵩」の字を使い、仙人がいた山ということから「仙山」とも書かれています。

かつて、この山には荒島神社が祀られていました。この神社は、奈良時代に大きな勢力をもっていた物部氏の一族である坂戸造が大野の地を治めていたころ、本家の物部氏の祖先を氏神としてこの山に祀ったものと伝えられています。

仏教の伝来 六世紀になってユーラシア大陸から仏教が伝わると、天皇の一族や有力な豪族たちは、日本の神を敬いながら、仏教の教えを信じるようになりました。国の繁栄を祈ったり政治にもとり入れるようになる、朝廷や豪族は、各地に寺をつくりしだいに仏教が広まってきました。

平安時代ごろになると、日本に古くからある神を祀る考え方の中に仏教が組みこまれることも出てきました。これを神仏習合といいます。この考えの中では、仏教の仏は、人々を救うためにさまざまな神の姿を借りて現れると考えられました。



木造 仏頭（荒島神社蔵）

今の荒島神社には、南北朝時代のものと思われ、ぶつぞう 仏像が祀まつられています。今は体の部分はなく、頭部だけが残っています。これは、神の姿をもとの仏ほとけの姿で彫ほったものと考えられています。この仏頭については、もとは荒島岳あらしまだけの中腹に荒島大権現あらしまだいこんげんとして祀まつられていましたが、文明年間（一四六九〜一四八七）の雪崩なだれにより神社の建物とともに谷底に押し流され、この頭部だけが見つかったと伝えられています。

荒島神社は一八六八年（明治元）

泰澄大師と山岳信仰

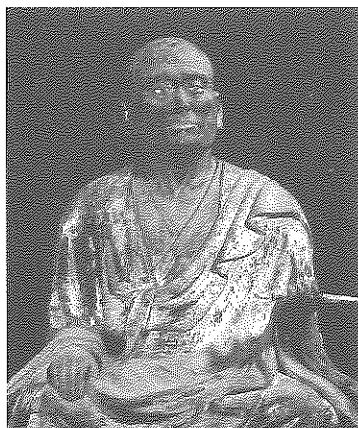
かつて、白山は神が宿やどる所とあがめられてきました。六

世紀には、白山を水源とする川の流域（石川県の手取川流域、福井県の九頭竜川流域、岐阜県の長良川・庄川流域）で、それぞれの土地に密着した形で白山信仰が生まれていたようです。

奈良時代になると、泰澄という高僧が、それまでの白山信仰をまとめました。



白山



木造 泰澄像

(朝日町大谷寺蔵 写真：朝日町
教育委員会提供)

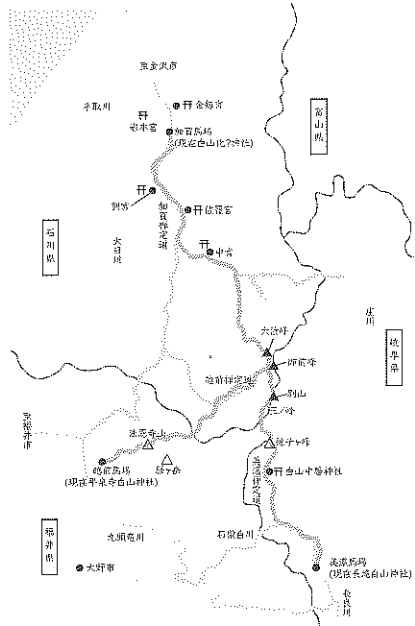
これまでは白山を遠くから眺めるだけでしたが、泰澄は、実際に白山に登ることにより、不思議な力を得ようと思いました。

泰澄は越前国麻生津に生まれ、十四歳の時に夢のお告げにより毎日越知山(朝日町)に通い修行をおこなっていました。が、七十六年(霊亀二)、三十四歳の時、修行中に見える白山に登れば、不思議な力を得ることができると思い、白山に登ることを決心したそうです。

七十七年(養老元)、三十五歳の時、大野の管川の近くで修行をしていると、夢の中に天女が現れたそうです。この天女が白山の女神であると思った泰澄は、以前にも増して白山に登りたいと思うようになり、その後、石徹白(岐阜県郡上市白鳥町)から白山に登ったと伝えられています。大野の管川とは九頭



発掘された平泉寺の通路
(写真：勝山市教育委員会提供)



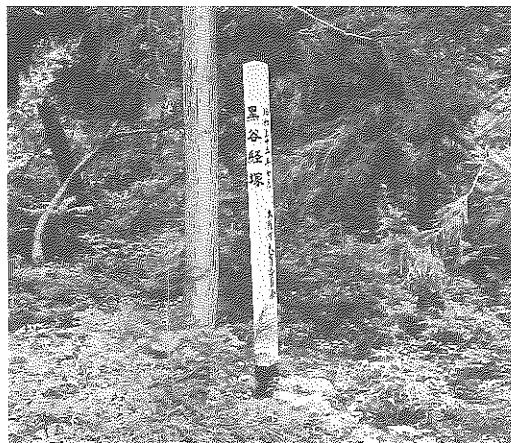
白山禅定道と三馬場

やがて平泉寺は白山信仰の中心となり、
 広い莊園しょうえんを持って、大野地方に大きな勢
 力を持つようになりました。室町時代むろまちに
 は、多数の院いんや坊ぼう（修行僧しゆぎそうや僧兵そうへいの住む
 施設）が山々やまに建っていました。境内けいだいに
 は四十八の社やしろと三十六のお堂、北谷には
 二千四百、南谷には三千六百、合わせて
 六千の坊舎ぼうしゃがあったそうです。

15

竜川りゅうがわのことだと思われます。
 その後、白山で修行しゆぎようを終えて下
 山すると、平泉寺へいせんじ（勝山市ちやう）に中
 宮七社ぐうしちやを建てて白山の守護神しゆごしんとし
 ました。現在全国にある白山神社しやまの
 は、この白山信仰が庶民しよみんの間に広
 がり、受け継がれていったもので
 す。

5



黒谷経塚 (下黒谷)

経ヶ岳の経筒

平安時代の終わりごろになると、仏教を開いた釈迦の教えが衰えてしまうという末法思想という考えが広まり、人々は世の中が乱れてしまうかと考えました。そのため、仏教の中でも、死後に極楽に生まれかわることを願う浄土教を信仰する人が多くなり、力のある僧や貴族は、極楽に行けるように、経筒という金属の入れ物や、壺に入れて土の中に埋めました。これらの場所を経塚といいます。入れ物の中には、經典のほか鏡なども一緒に入れることもありました。

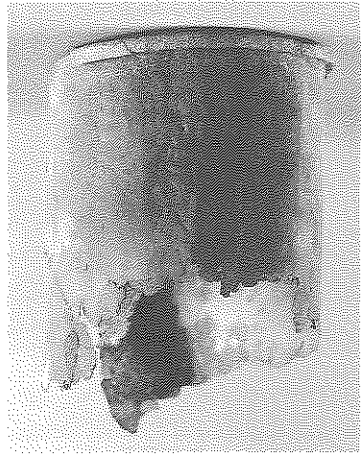
りました。

平泉寺 (勝山市) から白山へ登る道を白山禅

定道といい、法恩寺山の山頂を通っています。

この南隣りには経ヶ岳があり、法恩寺山の山頂から続く道が続いています。

この経ヶ岳の山頂には経塚があり、平泉寺の僧が經典を埋めたところなので経ヶ岳という名が付いたといい伝えられました。先年、そのいい伝えどおり、山頂から室町時代の經典をおさめた銅製の経筒が二本発見されました。



黒谷経塚出土の経筒
(東京国立博物館蔵)

黒谷観音の経塚 下黒谷にある仏性寺は、
通称「黒谷観音」と呼ばれています。同寺の
『由緒記』に、八〇七年(大同二)、藤原祐
信・小野行成によって開かれたことが記され
ていることから、平安時代には人々の信仰
を集めていたことがうかがえます。

一九一九年(大正八)六月に寺の境内を整

地しているとき、小さい丘にあった大杉の切株を掘りおこしたところ、その近くから石囲いのようなものが発見され、その中から銅製の筒を入れた甕や、鏡などが見つかりました。これらは一括して東京国立博物館に寄贈され保存されています。これらのおさめられた年月日やおさめた人の名前などが書かれている場合が多くありますが、仏性寺から見つかった経筒には「保元二年(一一五七)」と書かれています。また、一緒にたくさん鏡や、火打鎌など他の経塚からは見つからないものもいくつかあります。